

育児に奮闘しているパパたちが「パパ × 育児 × 〇〇」をテーマに考えるエッセイ集

ほぼ季刊

パパ育児



パパ育コミュ

vol.1

パパ × 育児 × 『ことば』

パパ育コミュ ZINE PJ

パパの辞書が、君によって書き換えられていく話／ミトス著
子どもと、もっと話したい、ただそれだけ／ざく著
自分の子からもらった“ことば”というプレゼント／しんしん著
「愛」は恐ろしい／ブラウン著
世界でいちばん、君のファン／ブロウ著
聖なる呪文「おっばいブー」／となり一著
言葉 ことば コトバ／むーむー著



ことば

目次 - パパ × 育児 × 『ことば』

巻頭記事 パパ育コミュ法人設立「パパが子どもを産む」

パパ育コミュ代表ノシカゴリラ 2

テーマ記事 パパ × 育児 × 『ことば』①

パパの辞書が、君によって書き換えられていく話ノミトス 6

子どもと、もっと話したい、ただそれだけノざく 7

自分の子からもらった"ことば"というプレゼントノしんしん 8

「愛」は恐ろしいノブラウン 9

コラム 手帳の目的とは

手帳サークルリーダーノイズミ 11

テーマ記事 パパ × 育児 × 『ことば』②

世界でいちばん、君のファンノブロウ 12

聖なる呪文「おっぱいブー」ノとなりー 13

言葉 ことば コトバノむーむー 16

パパ育活動紹介 パパが「学び合う」場、パパ育カレッジ

パパ育カレッジ部門長ノいっしー 17

編集後記

今号について 19

パパ育コミュ法人設立 - パパ育コミュ代表ノシカゴリラ

「パパが子どもを産む」

令和8年8月19日、パパ育コミュから生まれた新しい命

2026年8月19日。

残念ながら、男であるパパたちには、物理的に子どもを産むことはできません。
けれどこの日、僕たちは、ひとつの大きな「新しい命」をこの世に送り出しました。

パパ育コミュの法人設立登記が完了しました。

「パパ育」を象徴する「8819」の数字が並ぶ、令和8年8月19日。
この特別な日に、僕たちの挑戦は新たなスタートを切りました。

2020年6月に生まれた「パパ育コミュ」

パパ育コミュが生まれたのは、2020年6月。
最初から法人として始まったわけではありません。

「パパももっと子育てを楽しもう」
「パパ同士だからこそ話せることを共有しよう」

そんな想いをを持った人たちが少しずつ集まり、つながり、活動を重ねてきました。
気がつけば、たくさんのパパたちが関わり、自治体や企業との協働も生まれ、活動の輪は少しずつ広がっていきました。

そして2026年8月19日。

設立から約6年の時を経て、パパ育コミュは新たな一步を踏み出すことになりました。

コミュニティとして生まれ、育ってきたパパ育コミュから、今度は「法人」という新しい命が生まれたのです。

一步を踏み出す決断と、守りたかった「空気感」

以前から、パパ育コミュでは「法人化」の話が何度も出ていました。
コミュニティが広がるにつれて、自治体や企業との協働案件も増え、「社会的な信用」や「活動の受け皿」として、法人格が必要だと感じる場面が少しずつ増えてきたからです。

一方で、慎重な意見もありました。

法人住民税、会計・税務にかかるランニングコスト、さまざまな手続き……。
「そこまでして法人化する必要があるのだろうか」
そんな迷いも、当然ありました。

でも最後は、シンプルな想いに立ち返りました。

パパ育コミュ法人設立 - パパ育コミュ代表ノシカゴリラ

「悩んで立ち止まるより、失敗してもいい。まずは一步を踏み出そう」

そう、「案ずるより産むが易し」です。
法人化に向けて一気に動き始めたのは、2025年12月頃。
そこで僕たちが一番大切にしたのは、

「パパ育コミュの温かい雰囲気や、これまで大切にしてきた想いを絶対に壊さないこと」

でした。

法人化することで、コミュニティが窮屈になったり、誰かが「会社のために活動する」という構図になったりしてしまっただけは、本末転倒です。

そこで僕たちが選んだのは、法人とコミュニティの距離感を保つ形でした。
法人は、あくまでもバックオフィスとして活動を裏側から支える。
そして、コミュニティの自由でフラットな運営体制は、そのまま残す。

さらに、有志で関わるメンバーの兼業・副業規定などにも配慮しながら、「所有と経営を分離」できる株式会社という形態を選びました。

株主としてコミュニティに関わることができる仕組みを整えたのも、そのためです。

Color your life, color our lives.

一人ひとりの個性という「色」を大切にしながら、これからも彩り豊かなコミュニティであり続けたい。

その想いを守るための、今回の法人化でもあります。

怒涛の8月。「紙と実印」の壁

6月に基本合意を取り、8月19日の登記完了を目指して、一気に書類の準備が進みました。
しかし、ここで立ちどかかったのが、発起人の多さです。
印鑑証明書も早めに集め、「これで順調に進むぞ」と思っていた定款認証の直前。

突然、
「全員分の委任状が必要です。紙で。」
との連絡が。

8月19日まで、あと1週間。
しかもお盆休み。
帰省中のメンバーもいます。

そこからは、まさに時間との勝負でした。
急いで紙の委任状を用意し、実印を押してもらい、郵送してもらう。

「定款は電子署名できるのに、なぜ委任状は紙と実印なんだ……」

パパ育コミュ法人設立 - パパ育コミュ代表ノシカゴリラ

そう頭を抱えながらも、メンバーみんなが迅速に動いてくれたおかげで、なんとか間一髪で書類を揃えることができました。

公証役場での定款認証を無事に終え、次は法務局へ。
ところが、ここでも書類の補正が発生。

「もしかして、登記日がずれてしまうのでは……？」

一瞬、肝を冷やしました。
それでも補正に対応し、最後は無事にクリア。
そして――

令和8年8月19日。

ついに、パパ育コミュの設立登記が完了しました。

手塩にかけて、育てていく

2020年6月に生まれたパパ育コミュ。

約6年間、たくさんの人と出会い、笑い、悩み、挑戦しながら、少しずつ育ってきました。
そして今回、そのパパ育コミュから、またひとつ新しい命が生まれました。
みんなで悩み、考え、力を合わせて。
時にはドタバタしながら、たくさんの人の力を借りて、ようやく産み落とした、

「法人」という名の新しい命。

生まれたばかりのこの法人が、これから一体どんな子に育っていくのか。

そう考えると、今からワクワクします。
もちろん、これから悩むことはあるでしょう。
うまくいかないこともあるかもしれません。

それでも、この法人には、これまでパパ育コミュで積み重ねてきた、一人ひとりの想いや出会いが詰まっています。

だからこそ、みんなの想いを乗せたこの新しい命を、大切に、そして手塩にかけて育てていきたいと思えます。

法人化は、ゴールではありません。

2020年6月に生まれたパパ育コミュが、2026年8月、新たな形で次の一步を踏み出しました。
ここから、また新しい物語が始まります。

これからも、パパ育コミュらしい「空気感」を大切にしながら、僕たちなりの挑戦を続けていきます。

パパ育コミュと、僕たちの新しい挑戦を、これからもよろしくお願いします！

Color your life, color our lives.

パパ × 育児 × 『ことば』



パパの辞書が、君によって書き換えられていく話 / ミトス著

育児とは、実は「新しい言語」を学ぶ旅なのではないか。

最近、娘と会話をしながらそんなことを考える。

かつて、私にとつての「言葉」は、情報を正確に伝えるためのツールに過ぎなかった。

仕事では効率が優先され、結論から話すことが美德とされる。しかし、子どもという存在が私の生活に現れてから、その「言葉の辞書」は根底からひっくり返されてしまった。

例えば、「ちよつと待つて」という言葉。かつては数秒から数分の待機を意味する記号だった。

しかし、育児における「ちよつと待つて」は、子どもにとつては「今はわたしを見てくれないんだ…」という絶望に近いニュアンスを含むことがある。

その重みに気づいてから、私の辞書にある「待つて」の項目には、注意書きがびっしりと書き込まれるようになった。

あるいは、名前を呼ぶという行為。

これほどまでに、一日に何度も、そして愛おしさを込めて一人の名前を呼び続ける時間が人生にあったのだろうか。

また、「パパ」という、名前でも役職でもなくあだ名に近い親しみを込められた呼び名は、子どもが（あるいは妻が）何回何十回何百回と呼び続けてくれたことで気づいたら自分に定着してくる。

子どもの名前を呼ぶ。パパと呼ばれる。

それだけでコミュニケーションが完結し、お互いの存在を確認し合える。言葉とは、意味を伝える以前に「私はあなたを認識している」という光を放つものなのだと、子どもの寝顔を見ながらふと思う。

子どもは、大人の言葉をそのまま鏡のように映し出す。

私が何気なく使った語尾や、感情の乗せ方を、彼女は驚くほど正確に模倣する。

それは時に可笑しく、時に恐ろしい。

私の発する言葉一つひとつが、彼女の世界を形作るパーツの一部になっているのだと気づかされるからだ。

パパとして、私は君に立派な教育を施せる自信はないかもしれない。

けれど、せめて君の周りに漂う言葉だけは、澄んだものでありたいと思う。

美しい景色を見たときの感嘆、美味しいものを食べたときの喜び、そして、失敗した自分を許すための寛容な言葉。

私の辞書を書き換えてくれた君へ。

君がいつか自分自身の言葉で世界と対話するとき、その語彙の中に「愛されている」という確信が、一番太いフオントで刻まれていることを願って。



娘に与えたいことばたち



Profile

この記事を書いた人

ミトス

生まれ：1985年生まれ
家族：妻、長女(4歳)
長女出生時に育児を9ヶ月取得
職業：印刷会社営業
趣味：読書、漫画、UFOキャッチャー

子どもと、もつと話したい、ただそれだけ / ざく著

父親と子どもの間で話される言葉の在り様は、どのように変化してきたのだろうか。

二十世紀前半までは、父親は権威を示す存在であり、教訓や宗教的価値観を授ける者であって、自分の感情を語ることは少なかったようである。

日本では、南北朝時代末期から室町時代前期に成立したとされる『庭訓往来（ていきんおうらい）』に、衣食住、職業、仏教、武具、療養など、多岐にわたる一般常識が記されている。この「庭訓」という言葉は、中国故事に由来し、「父から子への教訓」という意味を持つとされる。父の言葉は教訓であるという側面が、ごく自然なものとして受け入れられていたのではないかと推察される。

二十世紀後半になると、フェミニズム運動や女性の社会進出に伴い、父親と子どもが接する機会は増した。そして、父親は、子どもと感情を共有する存在へと変化した。さらに、今世紀に入ると、父親は対等でオープンな対話の相手となり、話題も人間関係の悩みの相談にまで広がってきた。

ただ、父親像の過渡期にあたる世代では、自らが経験したことのない父親像を生きながら、子どもと向き合っている人も多いかもしれない。もちろん、これは母親にも共通するだろう。

この変化に戸惑う親が多いことは、育児書をひもとけばすぐに分かる。「いかに短い時間で深く子どもと関わるか」という問題意識をテーマとした書籍の多さが、それを物語っている。

仮に、子どもと十分に会話する時間があるとしよう。

そのとき、最も多くの子どもが問いかけると言われる、次のような質問に對して、私たちの返事はどのようなものになるだろうか？

人は死んだらどうなるの？

現時点では、

「うーん、難しいな。今は忙しいから、また後でね。」

と返事するので精一杯といったところではないだろうか。とにかく忙しい。

もし、十分に時間があるとすれば、なぜその疑問を抱いたのかを尋ねたり、君はどう思うのかと問い返したり、「人が死ぬ」とはどういうことなのかを共に考えたりと、さまざまな対話のアプローチを想像する余裕が生まれるだろう。

特別なノウハウを身につけようとしなくとも、子どもとどんな風に話したいのかは、自然に現れてくるのかもしれない。

対話の重要性を感じながらも、時間に追われる父親。「ちよつと待って、後でね」と言いながら、「これではない」と罪悪感を抱く父親。

この状況をどのように打開するかについて、決定的な解決策を持ち合わせているわけではない。

ただ、時間に余裕があると想像するだけで、私たちは子どもとどのような言葉を交わしたいのかが、自然と内側から湧き上がってくるのではないだろうか。

そうした言葉が立ち上がるまでの余白を、私たちはどうすれば持てるのだろうか。この問題意識をいかにしてより多くの人たちと共有できるだろうか。



hello

この記事を書いた人

ざく

生まれ：1985年10月生まれ

家族：妻、子ども3人
3人目の出生時に育児を5ヶ月取得

職業：金融関係/AI研究員

趣味：作曲、アート観賞、読書、アプリ開発

Profile



自分の子からもらった「ことば」というプレゼント／しんしん著

8

息子はよく言い間違いをしています。

スズメのことを「チュンチュンメ」、

ししやものことを「しやしやも」。

その響きがあまりにも愛らしくて、思わず笑ってしまいます。

きっと本人は真剣に話しているのに、こちらはその、間違いに癒されています。

そんな何気ないやりとりの中に、子どもからもらっている「ことばのプレゼント」があるのだと思うのです。

子どもが生まれる前、私は焦りや不安の中にいました。

自分たち夫婦は、子供が出来づらく、不妊治療を続けていました。

なかなか授からない時間は、想像以上に長く感じられ、

「自分は親になれるのだろうか」と何度も自問した日々。

周りの何気ない言葉に揺れたり、未来が見えないことに戸惑ったりしたことも。

それでも時間を重ねて、今こうして二人の子どもに恵まれ、日々の中で交わされる言葉に喜びを感じています。

「パパだいすき」と言われると、それだけで胸がいっぱいになります。

たった一言なのに、不思議なくらい力があるものですね。

仕事で疲れて帰ってきた日も、その一言で全部が報われたような気持ちになります。

子どもの言葉は、飾り気がなくて、まっすぐで、だからこそ強い。

その一方で、親として「ことば」の重さも強く意識するようになりました。

自分が子どもの頃にかけられた言葉は、大人になった今でもはつきりと覚えています。

「やせていればかつこいいのに」「だらしない」

「もつとちゃんとしなさい」

どれもきつと、親なりの思いやりや期待、いわゆる、親心、だったのだと思うのです。

しかしながら、当時の自分にとってはその言葉は励ましではなく、

ただ心に引つかかるものでした。

思春期の自分にとっては、「大きなお世話だ」と感じることも多かったのです。

言葉は目に見えないけれど、確かに積み重なっていく。

そして、受け取る側の状況や心の状態によって、その意味や重さは大きく変わります。

幼い頃にはただ嬉しかった言葉も、成長とともに重荷になることがあります。

だからこそ、親としてどんな言葉をかけるのか、その責任を感じずにはいられないのです。

最近、自分なりに大切にしていることがあります。

それは、「子どもの言葉はそのまま味わうこと」と、

「親としての言葉は一度、自分の中で消化すること」です。

子どもが発する言葉は、正しさや意味を求めすぎず、そのまま受け取って楽しめばいい。

その無垢さや自由さこそが、かけがえのないものだから。

一方で、親として発する言葉は、そのままたに出すのではなく、一度立ち止まりたいです。

感情のままにぶつけてしまえば、意図しない形で子どもに残ってしまうかもしれない。

だからこそ、その言葉は本当に今必要なのか、この伝え方でいいのかを、

自分の中でかみ砕いてから渡したいと思うのです。

子どもからもらう言葉は、こんなにも優しく、あたたかい。

だからこそ、こちらから渡す言葉も、同じようにあたたかいものでありたい。

完璧でなくていい。でも、できるだけ子どもの心に寄り添う言葉を選びたいと思います。

息子が言っていた「チュンチュンメ」という言い間違い。その何気ないことばを思い出し、私はまた笑って、救われるのかもしれない。

そしてそのたびに、「ことばっていいな」と、少しだけ自分の中の世界がやわらかくなる。そんな毎日をかみしめています。

Profile

この記事を書いた人

しんしん

生まれ：1982年6月12日

家族：妻、長男(6歳)、長女(2歳)
長女出生時に育児を12ヶ月取得

職業：団体職員

趣味：料理、読書、ボウリング



「愛」は恐ろしい／ブラウン著

「愛」という言葉が、恐ろしいと感じるようになったのは、いつからだろうか。

親にとって「愛」とは特別な言葉だ。子供の接し方について悩み、人に相談するとき、ひとしきり具体的なアドバイスを受けたのち、ポンと放たれる。

「まあ、結局は愛情を持って接していれば、それで大丈夫だよ」

あるいは、教育や心理学に多少興味のある人はこう言うかもしれない。

「子供の適切な愛着を築くことができるのは、親にとって大事だからね」

こんなことを言われることもある。

「そんなに思い悩むのは、あなたがお子さんを愛しているがゆえですね」

私の育児に関するもろもろの感情やコミュニケーションが「愛」という言葉でひとまとめにされる。そのとき、胸の内がざわついてしまう。「愛」は肯定的で温かいもの、育児においては絶対的な

ものはずなのに。手を差し伸べられているはずなのに、私と子どもが突き放されるような気持ちになるのだ。

なぜ私は「愛」を恐ろしいと感じるのか。いろいろ考えて行き着いた理由は、**「愛」という言葉の多義性にあると思う。**

「愛」という言葉には、四つの意味がある。一つは、小さなものに対する慈しみの感情としての「愛」。二つ目は、慣れ親しんだものへの愛着としての「愛」。三つ目は、制約や執着心としての「愛」であり、仏教を起源とする。四つ目は、「博愛」の愛であり、キリスト教を起源とする語義である。肉欲と人類すべてに向けた感情という正反対の感情がひとまとめになっているのである。改めて考えてみると、「愛」という言葉の意味空間は、随分と歪だ。

「愛」がこのような多義的な言葉となったのは、宗教などの外来の思想を日本語に翻訳した過程で生じる。『聖書の日本語』によれば、キリスト教において重要な超自然的な愛を意味する「カリダーデ(charidade)」に該当する言葉がなく、聖書を翻訳する過程ではさまざまな言葉に訳された。実は、最初の「カリダーデ」

の訳語は「愛」ではなく、「御大切」であったのだという。それが、いつのまにか「博愛」「愛する」という訳語が定着し、今に至る。

宗教だけでなく、心理学の用語でも「愛」の濫用はみられる。例えば、冒頭に挙げた「愛着」という言葉は、「愛着障害」とか「愛着理論」などのように、子供が乳幼児期に育む養育者とのつながりを論じる時に使われる。ところが、本来この意味での「愛着」の原語はattachment、直訳すれば「接着」であり、「愛」に相当するニュアンスはない。理論の上でも、attachmentは一般的な「愛情」とは別の概念だとされている。現に、発達心理学のテキストでは「アタッチメント」という訳語が使われており、「愛着」という用語の使用は避けられている。それなのに、社会的には圧倒的に「愛着」という訳語が浸透してしまっている。

困ったことに、日本ではよくわからない感情や概念に「愛」という馴染みのある言葉をとりあえず割り当てるのが好きなようだ。それは一見すると出会った感情や概念を理解できたようであり、単にその違いを覆い隠してしまっているだけなのではないだろうか。



私はこのような「愛」の多義性を、まるで駅のバスターミナルのようだと感じる。

子供や妻と一緒に動物園などどこかに出かける時、たまに駅からバスに乗り換えることがある。その時、私たちは一旦バスターミナルに行かなくてはならない。だが、単にバスターミナルを目指しただけでは、目的地には辿り着けない。バスターミナルにはいろんな方面のバスが入れ替わりやってくる。私たちは目的地向かうバスが止まるバス停の番号をきちんと認識して、待っていかなくてはならない。私はよく駅やバスを乗り間違えることが多い性分なので、こういう場面ではいつも緊張して間違えていないかと不安になる。もし間違えて目的地とは全然違う方面のバスに乗ってしまったらどうなるだろう？きつと動物園には辿り着けず、それどころか駅に戻るのも大変になってしまうかもしれない。

「愛」の多義性には、バスターミナルに立った時と同じような恐れを感じる。「愛」というターミナルには様々なバスが止まっている。「愛発・慈しみ行き」もあれば、「愛発・博愛行き」もある。それぞれ「か」「愛発・支配欲行き」や「愛発・肉欲行き」もあるのだ。「愛」という案内を渡され

ただけでは、私はどのバスに乗ればいいのかわからない。

もしかしたら、私は乗り間違えてしまうかもしれない。慈しむつもりが支配をしてしまうかもしれない、あろうことか肉欲につながるということもありうるかもしれない。子への感情が博愛に行き着くのも恐ろしい。人類すべての人を愛するということは、誰も特別には愛さないことだからだ。

そんな後戻りできない過ちへ私たち親子を連れていってしまう恐ろしさがこの「愛」という言葉にはあるように私は感じてしまう。だから、「愛」という言葉で親子の絆がひとまとめにされたとき、恐い、と感じる。颯爽とバスに乗り込むように「愛」を語る他の親御さんを目にしながら、私はついバスターミナルの前で立ち尽くしてしまう。

子供が生まれて半年と半年。それでも私はまだ、子供と相對しているときの胸の内の感情に名前をつけられてはいない。多くの人はそれを「愛」と呼ぶのかもしれないし、他の人がそう呼ぶのも構わない。ただ、私自身はその言葉をあえて使わないでいようと決めている。

きつと子供を育てる親の気持ちは、手っ取り早く「愛」というバスに乗り込むより、親子の足で、一緒

に歩きながら考えた方がいい。時間がかかるし、寄り道もしてまた戻ってを繰り返してしまうかもしれない。けれども、そこでゆっくり子供と見た風景や交わした言葉は、私たちを危険な場所へはきつと導かないだろうと信じている。

「文献」
鈴木範久、2006、『聖書の日本語翻訳の歴史』岩波書店



この記事を書いた人

フラウン

生まれ：1987年生まれ

家族：妻、長男(4歳)

職業：大学教員

趣味：読書、将棋

Profile





「手帳って何のために使ってる？」
そう聞かれたら、あなたは何と答えるでしょうか？

以前の私なら、「予定を管理するためですよ？」と答えていたかもしれません。

でも、父親になった今は少し違います。

子どもが生まれてからというもの、これまで自分たちの努力でやりくりできていたことが、コントロールできなくなりました。

- ・夜泣き、オムツ替え、寝かしつけ
- ・兄弟喧嘩の仲裁
- ・おもちゃの片付け
- ・保育園の送り迎えなど

自分では制御できない「何か」に、気づけば毎日追われるようになっていました。

「家族との時間を大切にしよう」という想いとは裏腹に、家族に対してイライラする回数が増えていく日々。感情に任せて怒鳴りつけてしまった後の罪悪感。

一体、自分は何をしているんだ。

もし明日、自分が急にいなくなったとしたら。思い出してもらえる私の顔は果たして笑っているだろうか。

そんなある日、ふと思ったんです。

「そもそも、自分はどんな人生を送りたいんだろう？」

そのとき出会ったのが、手帳でした。

目の前の予定だけじゃなく、ずっと先に続く「辿り着きたい景色」を言葉にして、そのために今日何をするかを決めて実行する。

本当にコントロールすべきは、自分のことだったんだと気付きました。

だから私にとって手帳は、理想の人生に辿り着くための地図です。

それからというもの、自分で手帳リフィルを作って日々記録するようになりました。

現在は好きが高じて、リフィル販売や手帳サークルの運営にも取り組み、紆余曲折しながら、手帳の魅力を広げる活動を続けています。

自分には制御できない「何か」にイライラする代わりに、自分を動かし、毎日をご機嫌に過ごす。手帳にはそんな力があります。

あなたは今、何のために手帳を使っているでしょうか？

【プロフィール】

イズミ／理念手帳プロデューサー

株式会社HEIRA 代表取締役

パパ育コミュでは手帳サークルリーダー・カレッジ担当として活動。「手帳で人生をカスタマイズ」をテーマに、手帳の使い方や人生を整える仕組みを伝えている。

聖なる呪文「おっぱいブー」

／ となりー 著

言葉という名の不完全な檻

言葉とは、つくづく厄介な代物である。

我々人類は、思考を伝達し、文明を築き、愛を語らうために「言葉」というツールを研磨してきた。しかし、その洗練の極致にあるはずの現代において、言葉はしばしばその役割を放棄する。SNSでの揚げ足取り、政治家の空虚な答弁、そして恋人たちの「別に」という言葉に含まれるテラバイト級の絶望。言葉は記号としての意味を失い、単なる音波の振動、あるいは網膜を刺激するピクセルの羅列へと成り下がっている。

哲学者ルトヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、その著書『論理哲学論考』の中で、言語の限界を「私の言語の限界は、私の世界の限界を意味する」と説いた。もしそうなら、私の世界は今、極めて卑俗で、桃色で、かつ排泄物に近い何かに侵食されていることになる。

私の家には、11歳になる双子の男の子がいる。彼らは今、人生で最も輝かしく、そして最も親を疲弊させる「不潔語（スカトロロジー）期」の真っ只中にいる。

彼らの語彙の大半は、解剖学的な特定の部位、あるいは消化器系の最終生成物に集約されている。「おっぱい」「おしり」「うんち」。これら三種の神器を組み合わせ、彼らは日々、新たなライムを刻み続けている。

親としての私は、この終わりのない「言語的テロリズム」に対し、二面性のある外交政策をとっている。家の中では「やんわりと、しかし無関心を装う」ことで、反応による強化を防ぎ、公共の場においては「断固とした拒絶と社会的制裁（という名の説教）」を下す。これは文明社会に生きる市民として、彼らに「POO」という名の首輪をはめるための、孤独で、かつ終わりのない聖戦なのだ。

だが、最近彼らが発明した、あるいは天啓として受けたフレーズは、私の理解を遥かに超えていた。

「おっぱいブー」

意味がわからない。おっぱい（乳房）とブー（放屁を意味する擬音、あるいは否定の意）の組み合わせ。そこに文脈はない。朝起きて開口一番の「おっぱいブー」。食事中に味噌汁をこぼした際の「おっぱいブー」。積み木が崩れた時の「おっぱいブー」。

それは、意味のゲシュタルト崩壊を起こした成れの果ての音節だ。私はあまりの脈絡のなさ、最近では注意することすら放棄し、彼らの口から溢れ出るその無意味な音を、ただの「生活ノイズ」として処理するようになっていた。

これが、後に私の精神を粉砕する伏線になるとも知らずに。

インフルエンザ、そして意味の消失

事件は、冬の冷たい風と共にやってきた。インフルエンザである。

最初に倒れたのは、双子の片方、次いで妻、三人目は私だった。39度を超える高熱。視界は歪み、骨の節々は碎かれた陶器のように軋む。意識の混濁の中で、私はベッドに横たわり、ただ呼吸をすることだけに全エネルギーを注いでいた。

そこへ、彼らがやってきた。熱が下がり、元氣を取り戻した息子①と、自分だけ魔の手から逃走中の息子②である。左右から、ステレオ放送のような完璧な定位感で、私の耳元に顔を寄せる。

「パパ、おっぱいブーだよ！」 「おっぱいブー！ おっぱいブー！」

高熱に浮かされる脳にとって、その音はもはや言葉ではなかった。それは、鼓膜を直接ナイフで削り取るような悪



意に満ちた振動だった。脈絡のない不潔語の連呼。30度の熱がある人間に向けて放たれる「おっぱいブー」。

私は、プツンと何かが切れる音を感じた。

「静かにしろ!! 向こうへ行け!!」

私は、彼らを怒鳴りつけた。普段、公共の場で見せる理性的で教育的な「注意」ではない。それは、生存本能に基づいた、剥き出しの「拒絶」だった。泣きべそをかいて去っていく双子の背中を見ながら、私は激しい後悔と、それ以上の怒りに震えた。

なぜ、もっと厳しく教えてこなかったのか。なぜ、彼らがこの無意味な、人を不快にするだけの言葉を連発するのを放置してしまったのか。私の教育的怠慢が、この「おっぱいブー」という怪物を育て上げ、病床の私を襲わせたのだ。熱にうなされながら、私は自分の子育ての失敗を呪った。言葉を正しく使えない人間は、社会から疎外される。私は彼らを、言葉の暴力者に育ててしまったのではないか。

数日後、当然の帰結として、逃走中だった息子②にもウィルスは牙を剥いた。

完全復活していた息子①は元気に「おっぱいブー」を連呼していたが、もう一人は今まさに30度に達し、完全にグッタリとしていた。数日前までの騒がしさが嘘のように、リビングは静まり返っていた。

行間に潜む、聖なる「魔法」

40度の熱で、氷枕に沈み込んでいる息子②。その傍らに、元気な息子①が歩み寄った。

私は、またあの「暴力」が始まるのだと思い、彼を引き離そうとした。病人を静かに寝かせておくのは、大人の世界の鉄則だ。言葉の刃で、弱っている兄弟をさらに傷つけさせてはならない。

しかし、元気な方の息子①は、今まで見たこともないような「真剣な表情」を浮かべていた。冗談を言っている顔ではない。悪ふざけをしている顔でもない。

彼は、ぐったりとした兄弟の耳元で、祈りを捧げるかのよう

うに、静かに、しかし力強く告げた。

「……おっぱいブー! だよ」

私は、その言葉を遮るべく、彼の手を掴もうとした。その瞬間だった。

グッタリとしていたはずの息子②が、薄目を開け、ほんの少しだけ、ニヤリと笑ったのだ。そして、深く、満足げに頷いた。

私は、掴もうとした手を空中で止めた。

雷に打たれたような衝撃だった。そこで交わされていたのは、情報伝達としての言葉ではない。それは、共鳴だった。

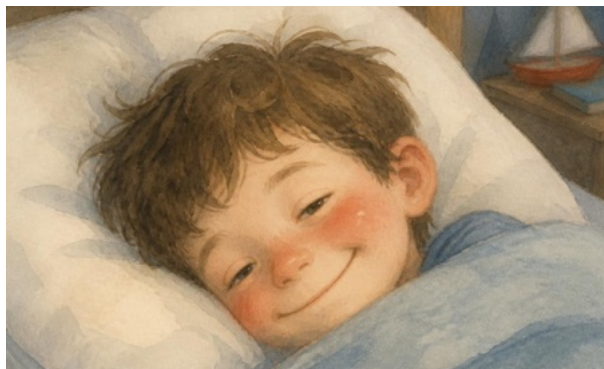
彼らの宇宙において、「おっぱいブー」という言葉は、大人が辞書的に解釈するような「卑俗な音の羅列」ではなかったのだ。それは、困難な状況にある相手に対する、彼らなりの最大限の励ましであり、「俺たちが共有している最高のジョーク」であり、世界の不条理を笑い飛ばすための「聖なる呪文」だったのだ。

ジャン・ピアジェは、その著書『児童の自己中心性』の中で、子供が他者への伝達を目的とせず発する言葉を「自己中心語 (Egocentric Speech)」と呼び、以下のように記している。

「子供は、相手が誰であるか、また相手が自分を聞いているかどうかにかまわずに話す。彼は、自分自身に対して話しているか、あるいはだれか傍にいる者の偶然の助けをかりて、快楽を味わっているのである。」

しかし、今私の目の前で起きていることは、ピアジェが定義した「自己中心性」の枠組みを遥かに超えていた。彼らの言葉は、伝達という形式を捨て去ることで、むしろ純粹な「祈り」へと昇華されていたのだ。

私が30度の熱で苦しんでいた時、彼らが左右から叫んでいた「おっぱいブー」は、決して私を攻撃していたわけではなかった。彼らは、彼らが持っている最強のカードを、最も強力な癒やしの魔法を、必死に私にかけてくれたのだ。



「パパ、これを言えば楽しくなるよ。大丈夫だよ、おっぱいブーだよ！」

そう言っていたのだ。行間を読む、という行為がある。しかし、私は彼らの「行間」どころか、文字通りその「優しさ」すら読めていなかった。社会性という名の定規で、彼らの魔法を測定しようとしていた。定規で、魔法の輝きを測れるはずがないというのに。

私は、インフルエンザの病床で彼らを怒鳴りつけた自分を、心の底から恥じた。彼らの優しさを、無知ゆえに「ノイズ」として切り捨てたのだ。

大人のルールと、消えゆく魔法

言葉とは、つくづく厄介な代物である。

モリス・メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』において、言葉は単なる「思考の記号」ではなく、身体的な表現そのものであると述べた。ω歳の彼らにとつて、「おっぱいブー」を発することは、呼吸をし、心臓を動かすことと同じ、生命の躍動そのものだったのだ。

「言葉が、話す主体に、あるいは聞く主体に、その思想を他へ運ぶための記号、信号、あるいは身振りにすぎないと思われているかぎり、……言葉のなかには思想の活動しか見いだされないであろう。」

(メルロ＝ポンティ、1967、p.234)

私は、彼らの中に「思想の活動」が見当たらないからといって、その「身振り」の価値をゼロだと決めつけていた。大人のルール、すなわち「社会性」という名の矯正具は、しばしば子供たちが持っているこうした無垢な、しかし強力な共感のツールを削ぎ落としていく。

「それは下品だからやめなさい」「それは意味が通じないから正しなさい」

そうやって、私たちは「正しい言葉」を彼らに植え付けていく。それと引き換えに、言葉の裏側に宿る、理屈を超えた「愛」や「連帯」を感じ取る感性を、じわじわと摩滅させていくのだ。彼らが「おっぱいブー」と言わなくなる日は、そう遠くない。彼らが「社会」という名の巨大な歯車に組み込まれ、適切な敬語を使い、空気を読み、意味のある言葉しか口にしなくなるその日は、一見喜ばしい成長の記録のように見えて、実は一つの美しい「神話」の終焉でもある。

言葉とは、つくづく厄介な代物である。

言葉があるから、誤解が生まれ、怒りが生まれ、大切な人の優しさに気づけない。私は言葉が嫌いだ。しかし、彼らが紡ぎ出す、あの意味不明な「行間」だけは、どうしてもなく愛おしい。

……とはいえ、だ。

やはり、公共の場で「おっぱいブー」を連呼されるのは、許容しがたい。スーパールのレジで、病院の待合室で、彼らがこの「聖なる呪文」を唱えるたびに、私の社会的HPは削り取られていく。

私は今日も、彼らに大人のルールを教え込む。「おっぱいブーは、おうちの中だけな」

彼らの魔法を削ぎ落としているという自覚を持ちながら、私は彼らを「退屈で正しい大人」の側へと引き寄せていく。それが教育であり、それが親の責任なのだと自分に言い聞かせて。

だが、もし私が次に、人生の荒波に揉まれてグツタリと倒れ込むようなことがあったら。

その時は、どうか私の耳元で、世界で一番くだらなくて、世界で一番温かい、あの魔法の言葉を囁いてほしい。

その時はもう、怒鳴ったりはしないから。

参照書籍

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳（2003）『論理哲学論考』岩波書店。
J. ピアジェ 著、大伴茂 訳（1954）臨床児童心理学（第1）『児童の自己中心性』同文書院。
モリス・メルロ＝ポンティ著、竹内芳郎・小木貞孝訳（1967）『知覚の現象学 1』みすず書房。

この記事を書いた人

となりー

生まれ：1986年生まれ

家族：妻、双子の男の子(4歳)
育休を12ヶ月取得

職業：メーカー勤務

趣味：キャンプ・読書・ギター

Profile



言葉 ことば コトバ / むーむー著

言葉 ことば コトバ

六歳の長男のことば
ずいぶん言葉が達者になったね

図鑑とゲームが大好きなきみ
いつも一生懸命生き物のことゲームの
ことを話してくれる

でもときどきあわてんぼう
しゃべりたいのにことばがついてこない
あわてないで ゆっくり聞くとよ

四歳の次男のことば
しゃべりたいことたくさんあるね

遊ぶのが大好きなきみ
いつも一生懸命レゴであそんでくるま
つくとて話してくれる

でもときどき舌たらず
がんばってしゃべっているのにことばに
ならない
あわてないで ゆっくりお話しして

言葉 ことば コトバ

長男が三歳だったころ
君はすこしことばがおそかった

はっきり単語がでてこない
しっかり文章にならない

ほかの子どもが達者にしゃべるのをみて
パパは不安だった

次男が二歳だったころ
君もことばがおそかった

なかなか二語文がでてこない
まだまだ喃語がぬけない

これくらい大丈夫 そう思っていたけれど
やっぱりパパは心配だった

言葉 ことば コトバ

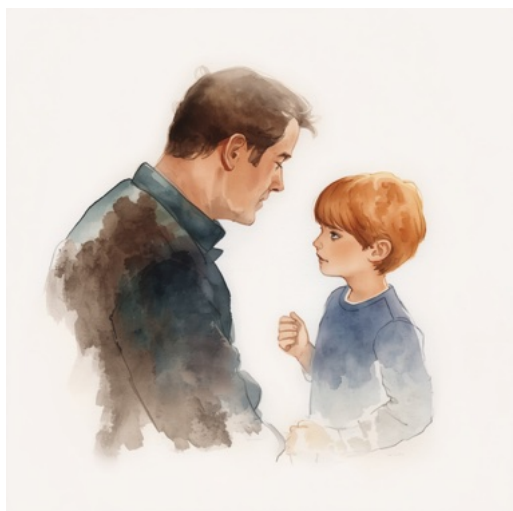
君たちが赤ちゃんだったころ
元気いっぱい泣いてたね

言葉 ことば コトバ

君たちはこの先どんな言葉を話すのだろう

言葉 ことば コトバ

パパも君たちに話す言葉を探しているよ



Profile

この記事を書いた人

むーむー

生まれ：1983年生まれ

家族：妻、長男(6歳)、次男(4歳)
次男出生時に育児を6ヶ月取得

職業：IT企業管理職

趣味：漫画、お酒



パパが「学び合う」場、パパ育カレッジ

「パパが学べるイベントを企画してみませんか？」

パパ育カレッジは、パパ育コミュ代表・シカゴリラさんからそんな声をかけてもらったことをきっかけに始まりました。

その声をいただいたときは「ぜひやってみたい」と思い、パパ育カレッジの立ち上げと代表を二つ返事で引き受けました。

その背景には、以前から抱いていた一つの想いがありました。

それは、育児は決して仕事の第一線から一歩引くようなネガティブな出来事ではなく、人として成長し、結果として家庭だけでなく社会にもより良い影響を与えられるようになる、大きな成長の機会だということです。

パパ育コミュには、会社員、経営者、エンジニア、教育関係者、コーチなど、本当に多様なバックグラウンドを持つパパたちが集まっています。それぞれが異なる専門性や経験を持っているからこそ、お互いの得意なことを教え合い、経験を持ち寄りながら学び合える場があったら面白い。そんな思いから、パパ育カレッジはスタートしました。

パパ育カレッジが大切にしているのは「学び合い」

パパ育カレッジとは、パパ同士が学び合う場です。

私たちが目指しているのは、一方的に知識を受け取るセミナーではありません。もちろん、外部講師を招いて専門的な知識を学ぶ機会もあります。しかし、それ以上に大切にしているのは、参加者一人ひとりが感じたことや悩み、経験を言葉にし、それが別の参加者の学びにつながることです。

育児には正解がありません。同じ出来事でも、家庭によって考え方や価値観は異なります。だからこそ、インターネットで調べれば見つかる一般論だけではなく、「自分はこんなことで悩んだ」「こんな失敗をした」「こんな工夫をしている」という一次情報を持ち寄ることに、大きな価値があると考えています。

また、カレッジでは、講師も固定されていません。

外部講師をお招きすることもあれば、パパ育コミュの運営メンバーや参加者自身が講師を務めることもあります。普段から講師として人前で話しているメンバーではなく、仕事で関わっているので少し詳しいという方が勇気を出して初めて講師に挑戦したケースもあります。

教えることは、自分の経験や考えを整理し、言語化する機会でもあります。参加者だけでなく、講師自身も成長していく。そんな学びの循環が生まれていることも、パパ育カレッジの特徴の一つです。

学びは、参加者と一緒につくるもの

これまでパパ育カレッジでは、AIを活用した親子向けワークショップ、パートナーシップや性教育、フェムテック、子どもとのコミュニケーション、目標設定、海外移住、異業種交流など、家庭・仕事・人生につながるさまざまなテーマで月に一度ほどイベントを開催してきました。

その中でも特に印象に残っているのが、「子どもにAIを使わせるべきか」をテーマにしたディスカッションイベントです。

このイベントでは、「AIを使わせるべき」「使わせるべき」という答えを提示することはしませんでした。それぞれの家庭や子どもの成長段階を踏まえながら、「自分ならどう考えるか」「これから子どもとAIにどう向き合っていくか」を参加者同士で語り合いました。

パパ育活動紹介 - パパ育カレッジ部門長/いっしー

育児に正解はありません。だからこそ、多様な価値観に触れ、自分の考えを深めていくからこそが学びになります。このイベントは、まさにカレッジが大切にしている「学び合う」という理念を体現した時間だったと感じています。

もう一つ印象に残っているのが、アドラー心理学のイベントです。

きっかけは、オープンチャットで「アドラー心理学について学びたい」という声が上がったことでした。その声に共感した参加者と、すでに学んでいた参加者が自然と集まり、入門セミナーを企画・開催することになりました。

その際、私たち運営が担ったのは、企画や運営のサポートだけです。テーマを決め、仲間を集め、イベントを形にしたのは参加者自身でした。

「学びたい」という想いが誰かの行動につながり、その行動が新しい学びを生み出す。この出来事は、私たちが目指している「学び合う文化」が実際に形になった瞬間として、とても印象に残っています。

学び合う文化を、もっと広げたい

現在は運営メンバーが中心となってイベントを企画していますが、私たちが目指しているのは、運営が学びを提供し続けるコミュニティではありません。

参加者一人ひとりが「こんなことを学んでみたい」と声を上げ、仲間を集め、自らイベントを企画し、また次の学びを生み出していく。運営は、その一歩を後押しするガイド役でありたいと考えています。パパ育カレッジが目指しているのは、イベントを増やすことではありません。パパたちが自ら学び、教え、仲間と成長していく「学び合う文化」を育てることです。

その文化がパパ育コミュ全体へ、そしてコミュニティの外へと広がり、一人でも多くのパパが育児をきっかけに人として成長し、家庭でも社会でも自分らしく活躍できるようになる。そんな未来を、これから仲間と一緒ににつくっていきたいと思っています。



https://www.college.papaiku.jp/?page_id=358

編集後記 - 今号について

表紙担当者より

京都鉄道博物館で一枚です。展示を楽しむ長男、着いた瞬間に「帰りたい」と言う次男、プラレールから離れない三男。「みんな違って、みんないい」なんて言う余裕もなく、僕はただ疲れ果てました。年の離れた兄弟と、家族みんなで出かけられる場所を探すのは、なかなか大変です。

テーマ記事担当者ひとこと



ミトス

色々なパパの日常や考えが垣間見えるZINEが生まれました。ワイワイ楽しんでます！



ざく

AIとのチャットが増える中、親子の会話はより深い対話へシフトするのかな。



しんしん

子育てしながら色々悩み、楽しみもあり。それをことばに乗せてます。



ブラウン

発達の記事を書こうとして、いつのまにか愛の記事に。言葉って不思議ですね。



ブロウ

子どもが届けてくれる感動は子育ての醍醐味ですね。だから子育てはやめられない。



となりー

教育って難しいです。患者が誰かを育てられるのか？子供から学んでばかりです。



むーむー

うちの子は二人とも言葉が遅い子でした。そのときの焦りを詩に託してみました。

編集長より

ようやく発刊できたという感慨でいっぱいです。プロジェクトのみんなで相談し、決定し、少しずつ進めてきて、ようやく形となりました。等身大のパパの声を聞いていただければ幸い。

奥付

書籍情報

タイトル：ほぼ季刊 パパ育 vol.1 パパ × 育児 × 『ことば』

発行日：2026年10月 初版

発行：パパ育コミュ（代表：シカゴリラ）

著者（敬称略、掲載順）：シカゴリラ、ミトス、ざく、しんしん、ブラウン、イズミ、ブロウ、となりー、むーむー、いっしー

連絡先：papaiku53@gmail.com

※本書の一部あるいは全部を無断で複製・複製することは法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意ください。